

論理と情熱の国語 古文文法講座 係り結び

△結び▽

・「ぞ」「なむ」「や」「か」↓連体形で結ぶ

(例)

「ぞ」 桂川、月の明かきにぞ渡る。 訳…桂川を、月の明るいときに渡る。

「なむ」 柿本人麻呂なむ、歌の聖なりける。 訳…柿本人麻呂は、和歌のすぐれた人であった。

「や」 土よりやわきけん。 訳…土からわき出たのだろうか。

「か」 いづれの山か天に近き。 訳…どの山が天に近いか。

・「こそ」↓已然形で結ぶ

(例)

「こそ」 世はさだめなきこそいみじけれ。 訳…この世は不定であるからこそすばらしいのだ。

△意味▽

・「ぞ」「なむ」「こそ」↓強意

・「や」「か」↓疑問（ゝか）・反語（ゝだらうか、いやゝない）

* 「やはゝ連体形」「かはゝ連体形」の形は反語が多い

＊「もぞ」（連体形結び）「もこそ」（已然形結び）↓懸念・不安（くするといけない、くすすると困る）

（例） 雨もぞ降る。 訳…雨が降ると困る。

鳥などもこそ見づくれ。 訳…からすなどが見つけたら大変だ。

＊「こそく已然形」で文が終わらずに「で下に続く時、くが、くけれども」という逆接の意味が加わる

（例） 身こそいやしけれ、心はさばかり下らんや。

訳…身分は低いけれども、心はそれほどに卑しいだろうか、いやそんなことはない。

＊人名・官職名＋「こそ」↓呼びかけ（くさん）

△結びの省略▽

「あり・侍り」「言ふ・思ふ・聞く」「なり」などが結びとなるとき、結びの省略が起こることがある。

・慣用表現・

（例） これなむ都鳥（なる） 訳…これが都鳥だ。

かかる徳もありけるにこそ（あらめ）。 訳…こんな御利益もあったのであろう。

暗けれど主を知りて飛びつきたりけるとぞ（言ひ）。

訳…暗いけれど飼い主を知って飛びついたのだということだ。

係助詞	省略語	係助詞	省略語
にや・にか	あらむ	とぞ	言ふ
にこそ	あらめ	とこそ	言へ

△結びの流れ▽

係助詞を受ける活用語であっても、そこで文が終止せず接続助詞に続く場合、結びの流れとして係り結びの関係が成り立たない。

（例） 人々~~なむ~~別れがたく思ひて、ののしるうちに夜ふけぬ。

訳…人々が別れることができないと思って、一日中さかんにあれこれしながら騒いでいるうちに、夜がふけてしまった。

↓「思ふ」が下の接続助詞「て」に続いて「思ひて」となり、「なむ」の結びが「思ふ」とならず消えている。